

するという向上し下向する弁証法論理を展開する中で家政学の本質を明らかにし、家政学・生活科学論争に一つの方向づけを試みる。

2. 3. これまで家政学の研究対象となった個々の具体的な現象を抽象するとそこに家庭生活現象のあることが理解される。問題は現象を現象として論ずることではなくそこに潜む本質をどう把握するかにある。本質の把握は事実としての現象存在の歴史による証明にまたざるをえない。そこには歴史を動かすモメントとしての生命の再生産があることをわれわれは発見する。そして今日においてもまた歴史の原点においても家庭の機能がまさに生命の再生産そのものであることに気がつくのである。その時点においてわれわれが再びその本質の現象形態をふり返るときコペルニクスの転回が行われるのである。すなわち家庭生活現象は生命の再生産という本質における現象形態の主たる構成要素でありながら決してそのすべてではなくその現象形態は歴史的に変化するものとして認識されなくてはならないこと。さらにわれわれの認識対象は家庭生活そのものでなく生命の再生産において必要とされる現象のすべてであることが理解されるのである。われわれはここに家庭生活という論理の極限から解放されるのであり、ここに論争の方向づけをみるものである。

## F-19 家政学の本質とそのコペルニクスの転回

東海学園女短大 村尾 勇之

1. 家政学における具体的な認識対象から本質を導きだし、それに基づいて理論体系をつくりあげ対象を再構成